

令和8年度

文教厚生委員会 行政視察報告

川崎市社協・三芳町・草加市・草加市立松原児童青少年交流センター「ミラトン」

令和8年7月7日（火）～7月9日（木）

浜田市議会 文教厚生委員会



OVERVIEW

視察の全体像

地域福祉の仕組み、こどもの権利、こども・若者の居場所を一体で確認



川崎市社会福祉協議会



三芳町



草加市



草加市立松原児童
青少年交流センター
「ミラトン」

地域福祉の
自立と伴走

こどもの声を
政策に変える

こども主体の
社会参画

若者の居場所
空間づくり

視察の共通テーマ：声を聴き、仕組みに変え、次の支援へつなぐ

SCHEDULE

視察行程と調査項目

3日間で4か所を訪問し、制度・運営・施設の実践を確認

7/7
川崎市社協

- ・社協の独自事業・組織運営・財政基盤
- ・行政とのパートナーシップ
- ・住民相談のデータ化と事業化

7/8 午前
三芳町

- ・子どもの権利条例の制定経緯
- ・CFCIを活用した推進体制
- ・子どもまちづくり会議

7/8 午後
草加市

- ・こどもまんなかの政策転換
- ・条例検討・意見反映の仕組み
- ・こどもファンド・基金

7/9
草加市立松原児童
青少年交流センター
「ミラトン」

- ・学習・交流・音楽・スポーツ空間
- ・自由に過ごせる居場所
- ・世代・学校を超えた交流

制度だけでなく、
「現場の動かし方」を見る視察

川崎市社協 | 行政の「下請け」ではなく対等なパートナーへ

現場の声を政策提言へつなげる、自立した地域福祉の推進主体



学び 01

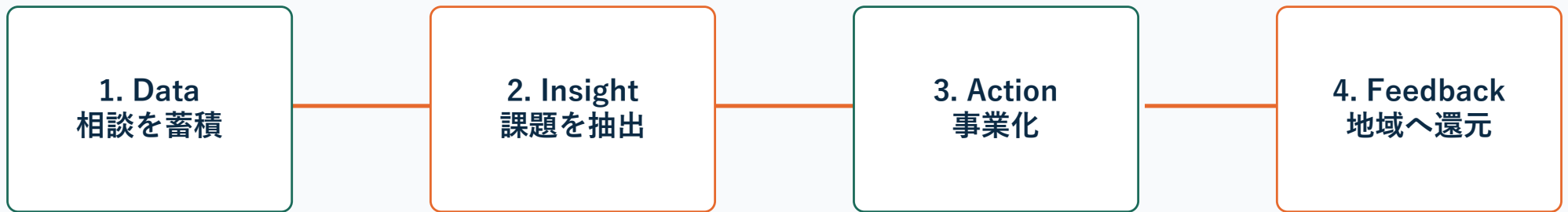
主体性ある社協運営

- 「行政の下請けにならない」という明確な姿勢
- 住民の声を現場で把握し、市へ政策提言・要望
- 地域福祉を推進する主体として行政と役割分担
- 会議・事業の乱立という課題も浜田市と共通

受託機関から
政策パートナーへ

川崎市社協 | 相談をデータ化し、事業に変える仕組み

「福祉相談」として受け止め、課題を見える化して新たな支援へ展開



- Googleフォームで相談を統計化
- 食料支援の現場で見た小さな課題
- 「おにぎりキャラバン」などの事業化
- 制度の隙間を埋め、公的支援へつなぐ

ポイント：現場の「気づき」を、属人的な経験で終わらせず、次の仕組みに変える。

川崎市社協 | 財政基盤と事業改善

補助金・受託事業に依存しつつも、自主財源・基金・リスク管理を意識



地域生活支援
SOSかわさき

福祉教育
チャレボラ

介護保険事業
立て直し

寄附・基金
企業連携

- 市内48法人のネットワーク、12拠点で食料支援
- オリエンテーション動画化により参加しやすさを向上
- 将来の事業撤退リスクも想定した計画的な積立
- 企業との連携により新たな寄附文化をつくる

MIYOSHI

三芳町 | こどもの声で まちの設計図を描き直す

こどもの権利条例とCFCIを、理念で終わらせず、実践の仕組みにする取組を確認。

声を聴く

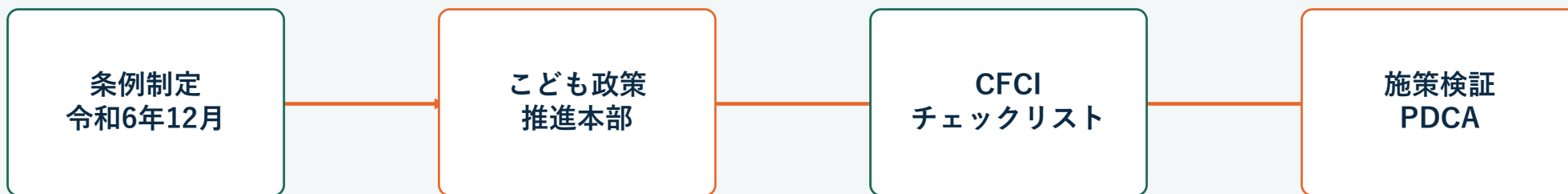
伴走する

施策に返す

「こどもにやさしいまちづくり」は、大人が良かれと思っで行うのではなく、
子どもの声を聴き、共に創る土壌を育てること。

三芳町 | 条例を動かす推進エンジン

町長を本部長とする推進本部と、CFCIのチェックリストで実効性を確保



ポイント：条例を「理念」に留めず、全庁で検証し続ける体制を持つ。

三芳町 | こどもの声が形になった事例

「聴く」だけで終わらず、施設・居場所・活動支援へ反映

遊具選定・壁画
デザインに反映

児童館の開館時間
19時まで延長

こども主体の
防災キャンプ

+18.7%

「こどもの権利を知っている」
回答割合が1年間で増加

- ・身近な居場所でのアンケート・ヒアリング
- ・こどもまちづくり会議で意見交換・ワークショップ
- ・こどもの意見を大人が受け止め、誠実に答えることを重視

課題：権利＝わがまま
という誤解への対応

草加市 | 「子育て支援」から「こどもが主人公」へ

こどもの思いが実現できるまち、すべての人が幸せに暮らせるまち



従来
子育て支援



新方針
こども主体の
共創

- 令和6年度から、権利尊重・意見表明・社会参画へ政策を転換
- 条例検討ではこどもの意見と条文案の対応関係を整理
- 教育委員会・学校とも連携し、権利の誤解を防ぐ

草加市 | 声を取りこぼさないための多層的な仕組み

ワークショップ、全校アンケート、出張ヒアリング、フィードバックを組み合わせる

こども会議
年齢別WS

無記名
全校アンケート

出張
ヒアリング

反映・非反映
理由を返す

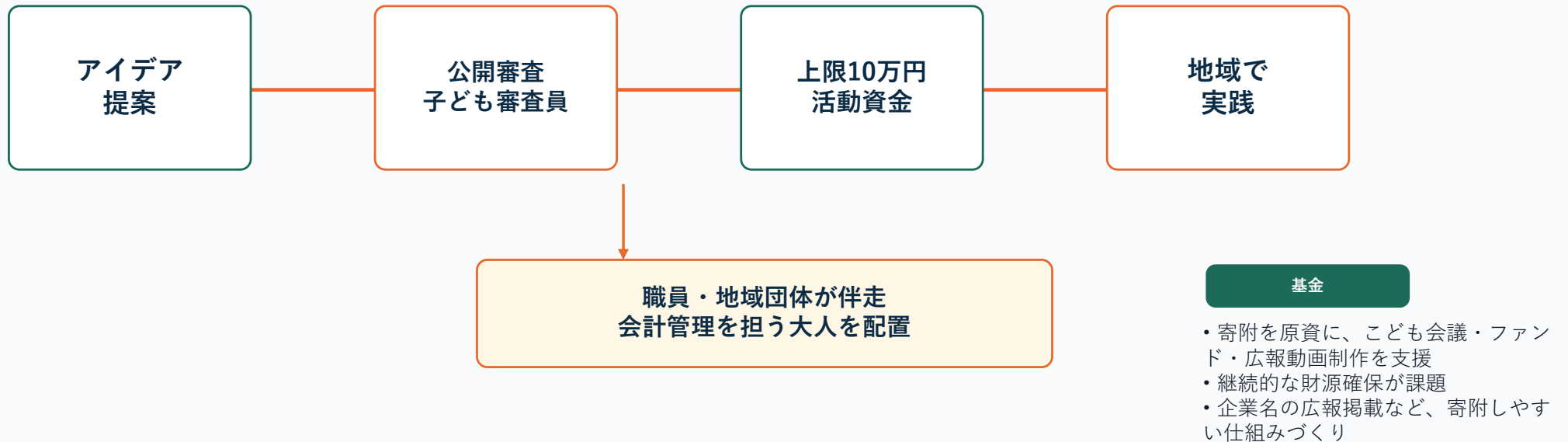


4,800件

小中高校生対象の
無記名アンケート回答

草加市 | こどもファンドとこども基金

こどもの発想を地域活動に変えるため、資金と伴走支援を整える



MATSUBARA YOUTH CENTER

草加市立松原児童青少年交流センター「ミラトン」 子ども・若者が自由に過ごせる居場所

学習、交流、音楽、ダンス、スポーツなど、多様な活動
に対応した明るく開放的な空間。

遊び

学習

音楽

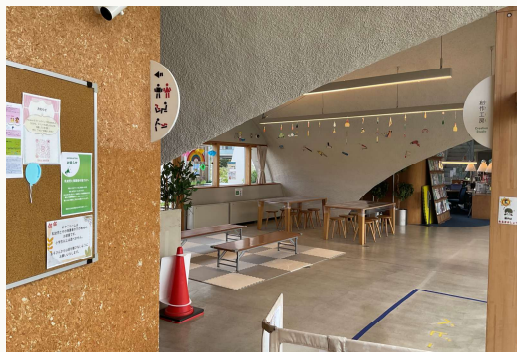
交流



MATSUBARA YOUTH CENTER

草加市立松原児童青少年交流センター「ミラトン」 施設機能と空間の確認事項

施設見学を通じて、子ども・若者の主体的な活動を促す工夫を確認



多様な活動に
対応する設備

目的に応じて
自由に過ごせる

世代・学校を
超えた交流

浜田市での
居場所づくりへ

施設見学のためのため、具体的な運営実績までは確認対象外。空間構成・設備配置・利用者の自由度を中心に視察した。

COMPARISON

4視察先から見えた共通構造

「声」や「相談」を起点に、事業・制度・空間へ落とし込む仕組みが鍵

視察先	起点	仕組み	具体化された形
川崎市社協	住民相談	データ化・事業化	SOSかわさき／チャレボラ
三芳町	こどもの声	CFCI・推進本部	条例・会議・補助金
草加市	こどもの意見	多チャンネル収集	条例検討・ファンド
草加市立松原児童 青少年交流センター 「ミラトン」	若者の活動	自由な空間設計	居場所・交流拠点

浜田市で問うべきこと：
「誰の声を、どう受け止め、どこへ返すのか」

浜田市への示唆 | 社協運営・地域福祉

人口減少・高齢化・担い手不足の中で、地域福祉を支える仕組みを再点検する

1
行政と社協の
役割整理

2
相談のデータ化
政策提言へ

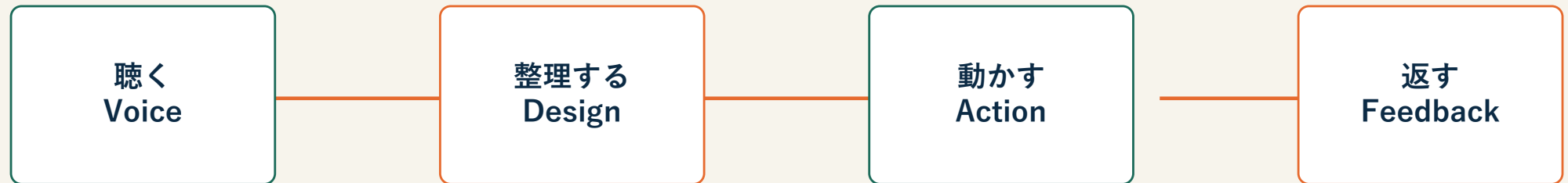
3
自主財源・寄附
リスク管理

4
制度の隙間を
つなぐ支援

- ・社協を「委託先」と見るだけでなく、地域課題を拾う政策パートナーとして位置付ける
- ・相談内容を統計化し、地域課題の変化を委員会・行政・社協で共有する
- ・補助・委託に加え、寄附・基金・企業連携など持続的な財源を検討する
- ・生活困窮、孤立、移動、買物など制度の狭間を次の支援につなぐ仕組みを整える

浜田市への示唆 | こどもの権利・居場所政策

条例制定を目的化せず、子どもの声が反映され続ける仕組みを設計する



- 学校・児童クラブ・子ども食堂・地域団体など、複数ルートで子どもの声を拾う
- 声の大きい子どもだけに偏らないよう、無記名・出張型・日常的な仕組みを併用する
- 反映できたこと、反映できない理由をこどもへ返し、信頼関係をつくる
- 居場所整備は建物だけでなく、活動・伴走・財源まで一体で検討する

CONCLUSION

視察のまとめ

今回の視察で確認したのは、先進的な制度そのものではなく、
「声を聴き、仕組みに変え、地域へ返す」実装力である。



浜田市においても、社協運営、こどもの権利、若者の居場所づくりを個別課題で終わらせず、
市民の声を政策へ循環させる仕組みとして検討していく必要がある。

◆ 4か所の視察を通じた考察

4か所を個別に見るのではなく、浜田市に必要な「仕組みの流れ」として整理することが重要

① 全体の捉え方

- ・4か所に共通していたのは、「現場の声を把握する」「施策として形にする」「活動を支える」「実際に過ごせる場を整える」という一連の流れである。
- ・川崎市社協は課題把握と事業化、三芳町は条例と推進体制、草加市は意見反映と社会参画、ミラトンは居場所の具体化を示していた。

② 川崎市社会福祉協議会からの示唆

- ・住民相談をデータ化・統計化し、「おにぎりキャラバン」や「地域生活支援SOSかわさき事業」へ展開していた。
- ・浜田市でも、相談件数だけでなく、相談内容・年代・地域・支援結果を整理し、市と社協が共有・分析する仕組みが必要である。
- ・社協が行政の下請けではなく、対等なパートナーとして政策提言する姿勢も重要である。

③ 三芳町・草加市からの示唆

- ・両自治体とも、こどもの意見を聴くだけでなく、条例・施策・事業に反映し、その結果や反映できない理由まで返していた。
- ・三芳町では全庁的な推進本部、草加市では約4,800件のアンケートや出張ヒアリング、こどもファンド等により、こどもの声を具体的な変化につなげていた。
- ・浜田市でも、意見聴取→反映→フィードバックまでを一体で設計する必要がある。

条例や制度だけを模倣するのではなく、現場で拾った声を政策へつなぐ「運用の仕組み」こそ、浜田市が学ぶべき核心である。

◆ 浜田市への具体的な活用方向

既存の資源をつなぎ直し、小さく試し、検証しながら進めることが現実的である

ミラトンからの示唆

- ・ミラトンは、学習・交流・音楽・ダンス・スポーツなどに対応し、目的がなくても立ち寄れる「自由に過ごせる居場所」であった。
- ・浜田市では同規模施設の新設を急ぐのではなく、児童館、公民館、図書館、学校、空き公共施設などを活用し、中高生や若者が使いやすい時間帯・機能を分散して整える視点が有効である。

必要な循環

- ・浜田市に必要なのは、「相談や意見を集める → 内容を分析する → 施策へ反映する → 活動を支援する → 結果を当事者へ返す → 効果を検証する」という循環の構築である。
- ・こども政策担当、教育委員会、福祉部門、施設管理部門、社協、学校、地域団体、企業の横断連携が不可欠である。

進め方のイメージ

- ・第1段階：こどもや住民の声を把握する共通の仕組みを整える。
- ・第2段階：少額の提案事業や既存施設を活用した居場所づくりを試行する。
- ・第3段階：条例や計画に位置づけ、成果を毎年度検証する。
- ・制度や施設をつくること自体を目的にせず、寄せられた声が地域の変化につながったと実感できることが重要である。

今回の視察の成果は、先進事例の導入ではなく、浜田市の実情に合った「声を政策へ循環させる仕組み」を具体化することにある。